

「もし神の子なら」 - マタイによる福音書講解説教 109-

詩篇 第22篇 7節~8節
マタイによる福音書 第27章 32節~44節
説教 岡村 恒 牧師

「神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ。もし神の子なら、自分を救え。そして十字架からおりてこい」。(40節)「いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう。」(42節)十字架の足元から、また一緒に十字架につけられた強盗の口から響いた声です。この時、主イエスは、十字架から降りてこなかったのです。ここに私たちの救いが、私たちの命があります。

主イエスは十字架にいたるまで、精神的、肉体的苦痛を味わい続けられました。背中を鞭で打たれ、頭を葦の棒でたたかれ、衰弱した体に重い十字架を背負わされ、見せしめのため引き回されたのです。十字架の重みに耐えかねて、何度も転んだ主イエスを見ても、誰一人として、手を貸そうとする者は現れませんでした。

ここで、クレネ人シモンという一人の人物が登場します。たまたま、そこを通りがかったという理由だけで、兵士たちから無理やり十字架を背負わされたのです。別の福音書では、このシモンはわざわざ、「アレキサンドルとルポスの父シモン」と紹介されています(マルコによる福音書第15章21節)。代々の教会は、このシモンがやがてキリスト者となり、その子たちもその妻も初代教会で重要な働きをした、と伝えました。

肉体の限界の中で、主イエスはゴルゴダ(アラム語で「どくろ」の意味)の丘に到着しました。ここで主イエスは麻酔のための没薬を拒否されました。最期の最期まで、意識を鮮明にして、肉体と魂の苦痛を受け止めるためです。

「これはユダヤ人の王イエス」、主イエス・キリストが十字架にかけられた時、こう書かれた罪状書きが十字架の上に掲げられました。裁判官ピラトが、『私はこの人には何の罪も見出す事ができない』と繰り返して宣言したあげく、死刑の判決を下した人物の罪状書きを、この日、多くの人が目にしました。ダビデ王の末裔に登場すると約束された王の中の王、まことの救い主。これが、主イエスの死刑の理由でした。

「いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう。」(40節)と、私たちも十字架に向かって同じように問いかけます。様々な疑いや迷い、願いごとを主イエスにぶつけて、『この祈りに答えてくれたら、そうしたら信じよう』と問いかけてしまうのです。

主イエスは、十字架に磔にされても、決して

そこから降りてくることをなさいませんでした。間違わないでください。主イエスは、降りてくるのが「できなかった」のでも、「降りてきたくなかった」のでもありません。降りようとさえ思えば、いとも簡単に降りてくることができたのに、十字架の上に留まり続けられたのです。それが父なる神の御心だったからです。私たちはここに、私たち自身の救いを発見し、喜びます。主イエスが、自分自身が救われることを放棄して下さったのは、私たちの救いを成就して下さるためでした。死人を墓から引き出すお方が、最も無力な姿でこの世に生まれ、私たちのために最も悲惨な姿で死んで下さいました。

主にある兄弟姉妹方が召される時、私たちは、人の死の理由について思い巡らします。そして繰り返し、私たちの命が神の御手に握られていること、私たちの死の背後に神の深い救いのご計画があることを思い知ります。いつどこで召されても、私たちには、朽ちず穢れず、変わる事のない神の国の到来が約束されています。

たとえ、この聖堂を出た途端、様々な思い煩いや出来事、人の言葉などが襲って来ても、どんなものも私たちを神から引き離すことはできません。あの日あの場所で主が十字架に留まり続けて下さって、神の約束が成就したからです。

旧約聖書の世界で、自分の身代わりとして子羊や鳩などを殺して、その血を神に捧げる時に「贖い」という言葉を使います。ユダヤ人の王、全ての神の民の王が「贖い」となって、ご自身の命を神に捧げて下さいました。ご自分の命を与えつけて、私たちを神の国の民として獲得し、私たちの王とされました。

クレネ人シモンは、すぐにその場から逃げ出したかも知れませんが、あのお方の十字架架と死の意味を考え続けたことでしょう。そして、主イエスの死と結びつけられた、その事実の中に、やがて自分自身の救いを発見し、主のみ名を讃美したのです。

死も滅びも病気も戦争も、私たち自身の疑いや迷いさえ、もはや私たちをこのお方から引き離すことはできません。この日、十字架の足元に立っていた者も私たちも、そこから目をそらすことをしません。このお方が約束の王なので、私たちは安心して、信じて生きればよいのです。神は約束の通りに私たちを神の民とし、永遠の命に生かして下さいますからです。